

「長沼守敬に関する包括的研究」

研究年度・期間：平成 28 年度

研究リーダー：石井 元章
(教養課程教授)

共同研究者：五十嵐公一
(教養課程教授)

十二 紀行
(アート・サイエンス
学科客員教授)

平澤 広
(萬鉄五郎記念
美術館学芸員)

本年度の藝術研究所共同研究調査「長沼守敬に関する包括的研究」は、①資料解読、②個別作品の研究、③現存作品の 3D 計測を柱として研究を進めた。以下、簡単に総括を行ない、次にそれぞれの研究メンバーの報告書を掲載する。

まず、①資料解読は、研究リーダー石井と共同研究者五十嵐が中心となって進めたが、江戸期日本美術を専門とする五十嵐をもってしても、変則的な明治期の文書は解読不能な箇所が多く、共同研究者萬鉄五郎記念美術館学芸員平澤広の「つて」を頼り、市川清志氏に謝金を支払って解読の下作業を依頼した。その結果、ある程度の進捗を見た。これまで解読の進んだ書簡・葉書は、長沼に数々の展覧会における審査員を依頼する書簡のほか、明治の貴顕からの制作依頼を含み、また、長沼本人が東京の妻ゆきに出した葉書はヨーロッパ旅行中の彼の旅程を明らかにしてくれる。

次の②個別作品の研究は、それぞれの作品に関する文献を収集する以外に、これまで存在の確認できなかった 18 点に及ぶ作品を見出すことに成功した。これについては研究リーダーと平澤の報告を参照されたい。

③現存作品の 3D 計測については共同研究者十二紀行の報告を参照されたい。

共同研究者五十嵐公一は、専門の江戸時代と長沼守敬の関係で報告をした。

*

研究成果発信の第 1 段階として、2018 年 2 月 18 日に大阪芸術大学スカイキャンパスでシンポジウムを開催した。その内容は次の通りである。

テーマ：長沼守敬研究の地平 「長沼守敬に関する包括的研究」報告

日付：2018 年 2 月 18 日(日)

場所：大阪芸術大学スカイキャンパス セミナールーム(2)

<http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/guide/campus/skycampus.html>

主催：長沼守敬に関する包括的研究の会(大阪芸術大学藝術研究所共同研究調査)

後援：イタリア学会 大阪芸術大学

プログラム

- 13:00-13:10 挨拶
石井元章 (大阪芸術大学教授)
- 13:10-13:50 明治彫刻史の中の長沼守敬
佐藤道信 (東京藝術大学美術学部教授)
- 13:50-14:30 日本統治初期の臺灣における総督及び民政長官の彫像の空間性について
李品寛 (台中市文化資産処 業務助理)
- (14:30-14:50 休憩)
- 14:50-15:30 長沼守敬研究の成果と課題 新発見の作品調査を中心に
石井元章 (大阪芸術大学教授)
- 15:30-16:10 長沼守敬とジャコモ・ボニー ヴェネツィア留学から大正期の日伊交流へ
福山佑子 (日本学術振興会特別研究員PD)
- (16:10-16:30 休憩)
- 16:30-17:30 パネル・ディスカッション
モデレーター 石井元章 (大阪芸術大学)

各発表者の発表者内容は、論考として拡充したうえ、2019年刊行予定のモノグラフに研究編として掲載する予定である。また、2020年を目処に展覧会を開催する方向で準備を進めている。

以下、それぞれの研究者の報告書を掲載する。

新発見の長沼守敬作品について

研究リーダー 石井元章

共同研究者 平澤広

長沼守敬は、自らの後には自分を超越する素晴らしい彫刻家が生まれるだろうと考え、署名を残さなかった。このため、時が経つと長沼の作品でありながら、帰属不明として扱われる作品も現れた。2006年の時点で長沼の作と確認されていた作品は、9体に過ぎない。ところが、彼は生涯に60体以上の作品を制作したという。60というこの数字は長沼の直筆になると考えられる「履歴書」と「製作像」、及び美術史家隈元謙次郎が残した手書きの「長沼守敬氏訪問記」(以下「訪問記」という三種類の文書に基づく。これらの手書き文書は前二者が萬鉄五郎記念美術館に、「訪問記」は東京文化財研究所に収蔵される。「履歴書」の後半部分は帰国後に制作した作品(肖像)のみに言及する。加えて、「現代美術の揺籃時代」(以下「揺籃時代」、「現代美術の揺籃時代」『中央公論』584号(1936年7月), pp.214-244; 再録『長沼守敬とその時代展』カタログ、岩手県2006, pp.140-151。以下、本カタログの頁数のみを入れる)を始めとする長沼関係の既刊の資料も存在する。

長沼守敬に関する研究の直近の成果は、2006年に開催された先述の『長沼守敬とその時代展』(以下そのカタログを『時代展』と略す)であったが、その後に「長沼守敬に関する包括的研究」チームが行なった研究調査で、これまで所在不明とされていた作品のうち、石膏原型等を含めて18体の作品を発見することができた。次に掲げる作品がそれに該当する。

- 《鍋島直大胸像》(佐賀鍋島報効会、石膏)
- 《岩倉右府公(具視)胸像》(東京国立博物館、石膏)
- 《木戸孝允胸像》(東京国立博物館、石膏)
- 《近衛忠熙胸像》(東京国立博物館、石膏)
- 《渡辺洪基胸像》(東京、個人蔵、青銅、石膏原型) x2
- 《岩下清周胸像》(東京、個人蔵、青銅)
- 《前島密胸像》(郵政博物館資料センター、青銅、石膏) x3
- 《長谷川謹介腰掛像》石膏原型(栃木県、個人蔵)
- 《久良知寅次郎立像》顔面(田川市石炭・歴史博物館、青銅)
- 《エルウィン・ベルツ胸像》《ユリウス・スクリーバ胸像》
(2体ずつ、すべてコンクリート製、群馬県草津町)
- 《エルウィン・ベルツ金メダル》(習作、または試作) x2

本稿の目的は、これらの作品が発見されるに至る過程を詳らかに記録することにある。そしてそこには、近代日本の彫刻、特に、所謂銅像を中心とした肖像彫刻が被ることになった問題が自ずと見え隠れすることになる。報告は、研究リーダー石井と共同研究者平澤が担当箇所を執筆した。

一 《鍋島直大胸像》(佐賀鍋島報効会徴古館、石膏、高さ74.2cm、最大幅53.0cm程度 底径21.0cm)(石井)

鍋島直大は佐賀藩鍋島家最後の藩主鍋島直正の長男で、明治維新後は旧大名の例に漏れず、外交官として活躍した。

本像は、1887年に帰国した長沼守敬が最初に制作した作品と考えられる。「揺籃時代」の中で彫刻家は次のように述べる。

扨て、帰朝したが、月給を取る職もなくさうかうしてゐるうちに、私より先に帰朝して式部長官をされてゐた鍋島侯から、その肖像製作を依頼された。鍋島侯の邸宅は今の総理大臣官邸の処にあつたが、その長屋でこつこつ仕事をした。油土を使はなかつたので、寒さの為面に矢張りぶつぶつが出来て困つた。製作費は羅馬で色々お世話になつた事であるから、一文も頂かぬ積りであつたが、無理にと云はれる事であるし私の方も財政逼迫の折柄

だつたので、有難く頂戴したことであつた。今でもその肖像は鍋島家の土蔵の中にある由である (p.145)。

すなわち本像は、イタリア渡航前の希望に反してヴェネツィア商業高等学校日本語教師の職に就けず、数ヶ月間に及ぶローマ滞在を余儀なくされた長沼を居候させ、何くれとなく面倒を見てくれた鍋島直大への報恩のためにもともと制作されるはずであった作品である (長沼の留学時代については、石井元章『明治期のイタリア留学 文化受容と語学習得』吉川弘文館、東京2017、第4章を参照されたい)。引用文中の事情から最終的に無償とはならなかったが、留学中の人間関係を基礎としていることは明らかである。

「履歴書」では「鍋島直大侯 胸像 石膏 同侯邸」、「製作像」では「一 鍋島直大公 石〔膏〕胸像」として、明確に記憶されている。それは、萬鉄五郎記念美術館に残された長沼関連資料12-32の「4月5日付鍋島直大の長沼宛葉書」によって裏付けられる。しかしながら、2006年の『時代展』カタログ (p.129) では、所在が「不明」と記されていた。

直大の父《鍋島閑叟 (直正) 公像》は当初長沼に依頼されたが、1911年トリノ・ローマ二重博



(図1.2) 《鍋島直大胸像》

覧会の事務取扱のため渡欧するため、長沼は弟子の武石弘三郎に任せた。研究チームは、この調査時から鍋島藩関係の資料を保存する鍋島報効会徴古館と遣り取りがあった。今回も二度ほど調査を依頼したが、その二度目の2018年1月に未整理の資料の中から、当該《鍋島直大胸像》の石膏像 (図1.2) が発見された。正式な大きさの計測と、写真撮影を依頼し、成果を得た。

石膏像はかなり細かい部分まで丁寧に作られており、瞳は輝きを放ち、顔には若き日の鍋島氏の生き生きとした表情が溢れている。髪の毛の扱いにも、《リド島にて》と同じく、ヴェネツィア美術学校での勉強の跡が窺われる。

先方を煩わしながらも、粘り強く調査を続けることで発見に至ったのが本像である。

二 《岩倉右府公 (具視) 胸像》(着色石膏、高：67.5cm、図3) 《木戸孝允胸像》(着色石膏、高：69.7cm、図4) 《近衛忠熙胸像》(着色石膏、高：72.7cm、図5) (以上、東京国立博物館) (石井)

前二者の像主について説明は不要であろう。近衛忠熙は、明治天皇に重用され、請われて京都から東京に移り住んだ公家である。

これら3体の像について「揺籃時代」は言及しない。しかし、「履歴書」には「故岩倉右府公胸像 石膏 博物館 / 木戸公 胸像 石膏 博物館」、そして「製作像」には「博物館 一 木戸孝允公 石〔膏〕胸像 一 近衛忠熙公 石〔膏〕胸像」との記述が見られる。すなわち、「履歴書」には《近衛忠熙胸像》についての記述が欠けており、反対に「製作像」は《岩倉具視胸像》



(図3)《岩倉右府公胸像》



(図4)《木戸孝允胸像》



(図5)《近衛忠熙胸像》

について言及しない。

2014年に東京国立博物館に電話で問い合わせると3像とも存在が確認できたため、翌春許可を得て作品調査に訪れた。3体とも長沼の署名を欠く。これらの像について触れていた東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 近代彫刻篇』(1994年)の存在も、遅まきながら確認した。同書によると、これら3体は明治24年(1891)3月20日付東京国立博物館第142号文書によって「固有ノ美術性質ヲ奨励シ進歩ヲ促サング為」に東京美術学校宛に制作依頼がなされたものである。「世人ノ能ク知ルモノヲ表ハス」方がいいということで、博物館長九鬼隆一は岩倉・三条・大久保・木戸らの名を挙げて、像の制作を指示した。東京美術学校長岡倉覚三は翌日返事し、4体のうち岩倉・木戸を長沼が、三条・大久保を大熊氏廣が担当することになった。《近衛忠熙胸像》は、文書に言及がないが、『東京国立博物館図版目録 近代彫刻篇』では、同制作依頼に基づくものとして扱う。

長沼はこれらの像を一体ずつ順番に制作していったらしく、《岩倉具視胸像》は1893年12月27日に、《木戸孝允胸像》は1894年5月14日に納入され、《近衛忠熙胸像》に至っては、長沼が第2回ヴェネツィア・ビエンナーレでの事務取扱を終えて帰国した後の1899年6月14日に購入されている。1892年に制作を依頼された《毛利家群像》の制作に専念していたために遅れたものと考えられる。

展示に当たって青銅の雰囲気が出るよう、石膏像には青銅を思わせる彩色が施されている。一方、胸像の形式は3体の中で異なる。岩倉・木戸の2体は、十五世紀フィレンツェの肖像彫刻の伝統を踏まえ、胸の所で真一文字に切った形になっているのに対して、長沼のイタリア再訪後に作られた近衛像のみは十六世紀以降に普及する裏を彫り込んで台座を設けるタイプを示す。この形式差異の理由は不明である。

三 《渡辺洪基胸像》(青銅、高さ: 31 cm 幅: 18cm 奥行: 14.5cm、東京、個人蔵)(石井、平澤)

渡辺 洪基(わたなべ ひろもと、1848-1901)は明治時代の日本の官僚、政治家であると共に、学問研究・教育の分野でも礎を築いた先人のひとりである。学習院次長、元老院議員、工部少

輔、東京府知事、帝国大学（東京大学の前身）初代総長、オーストリア駐劔日本公使、衆議院議員、貴族院議員を歴任し、東京統計協会（日本統計協会の前身の一つ）、国家学会、日本建築学会、工業化学会（日本科学会の前身の一つ）など多数の学会の会長を務め、工手学校（工学院大学の前身）、大倉商業学校（東京経済大学の前身）の設立にも関わった。渡辺は、1889年の明治美術会結成に際し、会頭に就任している。明治美術会は、当時の国粹主義的な美術界の風潮に抗して浅井忠、松岡寿などの洋画家と彫刻家長沼守敬らが結成した美術団体で、1890年代の日本美術界を牽引した。

「揺籃時代」は東京に作った作品の一つとして「渡辺洪基氏のもの」(p.243)を挙げ、「製作像」は「渡邊洪基君 銅 小胸像」と言及し、「訪問記」は「渡邊洪基像（胸像）渡邊家」と伝える。この作品も『時代展』カタログでは所在「不明」(p.130)とされていた。

一方、萬鉄五郎記念美術館長沼関連資料12-39は、建築学会長辰野金吾の名で前会長渡邊洪基氏への「謝意ヲ表スル為メ同氏ノ肖像銅製壹個贈呈」したいから「代金八拾円」で制作してほしい旨、明治31年12月18日付で長沼守敬に依頼する。辰野はヨーロッパ遊学中にヴェネツィアの長沼の下宿に泊めてもらい、それ以降ふたりの友情は生涯続くことになる。また建築学会役員であった妻木頼黄は、1886～89年にベルリンに留学した時期に長沼と知り合っている。この資料に基づき、2018年初頭に日本建築学会で調査をしたところ、『決議録』の中にこの文書に先立つ経緯を見出すことができた。

それによれば、日本建築学会初代会長を務めた渡辺洪基に謝意を表するため、明治31年(1898)1月18日開催の役員会が「五十円ニテ同氏ノ銅像ヲ調製シ贈呈スル事」を決め、「一切ノ事務ハ幹事^と君」に任せるといふ。ついで4月6日の役員会は調製費を30円増額する決定をした。12月12日の役員会で長沼守敬に依頼することが決まる。これに基づき上記関連資料12-39の依頼書が作成された。作品の完成後、明治32年(1899)6月12日の役員会で「箱入ニ致シ札状ヲ添へ幹事持参」すること、及び引き渡しを最終的に会長[辰野金吾]と幹事に一任する事が決まり、渡辺氏に贈られた。したがって、制作は1898年末から1899年前半ということになる。長沼への依頼の理由に、明治美術会での渡邊とのつながり、長沼の実力に対する評価に加えて、辰野・妻木との友誼があったことは、ほぼ間違いない。

2018年3月12日渡邊洪基氏の子孫のお宅を訪問し、初めて作品自体を確認することができ



(図6) 《渡邊洪基胸像》



(図7) 《渡邊洪基胸像》裏面
「敬贈 前会長渡邊洪基君 建築学会」

た(図6)。この青銅小像の裏面には「敬贈 前会長渡邊洪基君 建築学会」と刻み込まれており(図7)、『決議録』に記された上の経緯を確認できる。長沼の署名はない。制作者長沼はいつも通り署名をしていないのである。現当主の話では、1997年に渡邊家の現当主

が曾祖父洪基氏の建てた家に移り住んだ時には、当該胸像は2階部分に置かれていたと言う。渡邊家においても、作者や由来は知られていなかった。小型ながら、細かい表情まで表した優れた作品である。

それとは別に平澤は、東京大学博物館の「インターメディアテク (IMT)」(東京駅 (KITTE) 内) に展示されていた《渡辺洪基胸像》を偶然発見した(図8)。黒く塗られた石膏像で、石膏原型と考えられるものであった。展示物は作者不明となっていたが、ヌメツとした皮膚感を有した柔らかく粘りを伴うフォルムを持つ。小像ではあるが丹念に制作された跡が見て取られ、慎重さも兼ね備えた像であった。全く同じ外見から、博物館所蔵の作品が渡邊家に伝来する青銅像の石膏原型に着色を施したものであることは明らかである。



(図8) 《渡辺洪基胸像》
石膏原型

今回判明した「渡邊洪基像」の所蔵先は次の通りである。

《渡邊洪基胸像》 石膏原型(着色)、小胸像、東京大学

《渡邊洪基胸像》 青銅像、小胸像、渡邊家(東京都内)

四 《岩下清周胸像》(青銅、高72.6cm、肩幅：51.2cm、胸幅：30.0cm 東京、清周寮)(平澤)

長野県出身の岩下清周は明治期の財界人であると同時に、明治美術会に名を連ねる文化人でもある。元三井物産社長、北浜銀行設立、衆議議員、現在の近畿日本鉄道社長を務めたほか、不二聖心女子学院中・高等学校を設立した。1889(明治22)年、浅井忠らが発起人となり創立された明治美術会の幹事には政治家の原敬とこの岩下がいた。同会の会計担当として岩下は、会の用務連絡を書きこんだ転居案内葉書などを残している(書簡「岩下清周差出 長沼守敬宛 葉書」紙・墨 1906(明治39)年9月26日;書簡「岩下清周差出 長沼守敬宛 葉書」紙・インク 1906(明治39)年8月30日)。明治美術会に属していた長沼守敬と旧知の仲であったことは想像に難くない。長沼が東京美術学校の教授を辞すときも必死に慰留に努めたという。

本像に関して「揺籃時代」「訪問記」には言及がないものの、「履歷書」には「岩下清周氏 胸像 鑄銅 同家」、「製作像」には「岩下清周君 銅 胸像」との記述がある。『時代展』は所在を「不明」(p.129)としていた。制作年も不確定な作である。

今回の調査で本像の存在がはっきりになったが、その経緯に触れる前に岩下の経歴をおさらいしておきたい。それが今回発見に至ったカギを握っているからである。岩下清周は、明治41年から衆議院議員を2期、箕面有馬電気軌道(後の阪急電車)初代社長、大阪電気軌道(後の近畿日本鉄道)2代目社長、そして大林組の設立に尽力するなど、関西財界の一翼を担った人物である。しかし、1915(大正4)年に北浜銀行内の反岩下派に背任・横領で訴えられ、有罪判決を受けて同行を去ることになる。その後は実業界を離れ子女教育に尽力し、1921(大正9)年には温情舎小学校(現、不二聖心女子学院。静岡県裾野市)を設立した。1928(昭和3)年に72才で没す。

「訪問記」には言及がないものの、「製作像」は「岩下清周君 銅 胸像」、「履歷書」は「岩下清

周氏 ヶ[胸像] ヶ[鑄銅] 同[岩下]家」と記述する。

その所在を確かめるため岩下家ゆかりの静岡県にある不二聖心女子学院中・高等学校に連絡すると、誰の作か不明だが、確かに《清周像》はあったという証言を得た。それは現在、東京都内にある岩下家が設立にかかわった福祉施設「清周寮」にあるという。早速、清周寮をネットで検索すると『清周寮通信』なるページを発見した。その中の過去の通信を見ていくと、なんと《岩下清周胸像》が掲載されているのではないかと。画像は荒くてこの時点ではそれが長沼作なのか判断しかねたが、寮に電話すると確かに清周像は存在するが、ここでも作者は不明と言われた。



(図9)

そこで実見に向う段取りをし、研究リーダー石井と共に同寮に向ったところ、緑青色の青銅像が階段踊り場に設置されていた(図9)。像が緑青色の点は長沼の他の作と共通するが、遠目からは肉感と顔の表情に乏しいのっぺりした扁平のディテールの像に見えた。しかし、恐る恐る近づいてみると、扁平に見えたのは暗い踊り場のせいで、実際には繊細なニュアンスのマッサで顔の表情を捉えていた。そのディテールには、並みの作家には真似のできない肉づきと皮膚感覚を巧みに表現した、こなれた技量が窺えた。紛れもなく長沼の手による作品であることがわかった。その後、この像は東京芸大で3D撮影することになる。

今回判明した《岩下清周胸像》の所蔵先は次の通りである。

《岩下清周胸像》青銅、胸像 清周寮

五 《前島密胸像》(日本郵便、石膏原型)(石井、平澤)

像主は言わずと知れた郵便制度の創設者である。「履歴書」と「訪問記」は何も言及しないが、「製作像」には「同[前嶋]家 一 前嶋密男 ヶ[青銅]小胸像 ヶ[同家] 一 同夫人 石[石膏] ヶ[小胸像]」と、「揺籃時代」(p.151)は「石膏では(中略)前島密男夫妻」と記述が残る。後者では前島密、夫人の胸像とも石膏像であるとするが、「製作像」は男爵像が青銅製、夫人像は石膏のままであると述べる。これを受けて、『時代展』(p.130)は「小胸像 ブロンズ一緒に制作された夫人の小胸像(石膏)とともに不明」としていた。

前島は1835(天保6)年、新潟県上越市に生まれたことから、平澤が上越市の前島記念館に連絡し、長沼による胸像について問い合わせたところ、市内の出身校にあるという。早速、出身中学である市内雄志中学に連絡すると学校の前庭に彫刻が設置されているという。その写真(図



(図10)

10) が送られてきたので確認すると、だいぶ風雨にさらされて傷んでいるものの、柔軟性に富む顔のモデリングから長沼作と直感する。

一方、石井は2014年夏に日本郵便株式会社大阪支社を訪れて広報担当者に長沼の作品が収蔵されていないか尋ねたところ、東京都江東区の郵便博物館資料センターに作品があるとの情報を得た。同年11月18日に同センターを訪れ、《前島密胸像》の石膏原型(図11)を確認した。署名はないが、様式的に長沼の作品であることは間違いない。また、背面には「明治四十年六月二十四日鑄造」(図12)と彫り込まれていることから、鑄造年が1907年であることがわかる。東京スカイツリータウン9階に位置する郵政博物館には、おそらく石膏原型に基づく着色青銅像(図13)が置かれている。



(図11) 《前島密胸像》石膏原型 (図12) 背面「明治四十年六月二十四日鑄造」 (図13) 石膏原型に基づく着色青銅像

胸像の制作段階としては、石膏原型を基にロスト・ワックスの手法で青銅像が作られるのが主流であろうから、男爵像が石膏原型に止まったかどうかについての文書間の齟齬は、長沼の記憶の曖昧さに由来する可能性がある。

今回判明した《前島密胸像》の所蔵先は次の通りである。

- ① 《前島密胸像》青銅像、胸像、新潟県上越市 雄志中学
- ② 《前島密胸像》石膏原型(着色)、胸像、郵政博物館資料センター(千葉県市川市)
- ③ 《前島密胸像》青銅像、胸像、郵政博物館

前島家が依頼した《前嶋密夫人像》(石膏原型、小胸像)についても併せて調査したものの、現在、前島家の後を継いだ子孫が不明であり、公の施設に納められた《前島密像》とは違って、全く辿る術がない状況である。

六 《長谷川謹介腰掛像》石膏原型(栃木県、個人蔵)(石井)

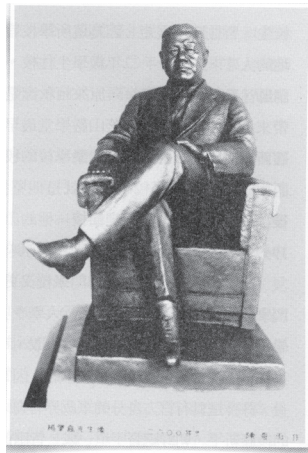
本作は1897年の第2回ヴェネツィア・ビエンナーレに旅立つ前に作られた畢生の大作《毛利家群像》(戦時中の金属供出で逸失)と同様に、1911年のトリノ・ローマ二重博覧会の事務取扱のためにイタリアに渡航する直前に、長沼が精力を傾けて仕上げた作品である。それは、我々に残された写真の中で、唯一長沼が自作と共に写っていること、及び腰掛ける像という新しいタイプを日本で初めて作ったと彫刻家本人が述べていることから推察される。

「揺籃時代」では「台湾に二つ。(中略)一人は台湾縦貫鉄道をやつた長谷川謹助といふ人の椅子に腰かけた像で、日本の銅像で座像はこれが始めてである。共に台北に建つている」(p.150)と述べる。ここでは本像を「椅子に腰かけた像」「座像」の双方の言葉を使って記述するが、「製作像」では「長谷川謹介君 ッ[銅] 椅子ニ掛ケタル」と述べ、「履歴書」では「長谷川謹介氏腰掛像 ッ[鑄銅] 台湾」として、「腰掛像」という概念を強く打ち出している。ちなみに「訪問記」は銅像の一つとして「長谷川謹助像 台北市」を挙げるのみで、像の形式には言及しない。

長沼は丸彫像を幾つかのカテゴリーに分けて記す。「履歴書」は「薄肉肖像」「薄肖像」[共に薄浮彫の肖像か?]「肖像(メダイル)」「胸像」「馬上像」「立像」「小立像」「座像」「腰掛像」の9つに、「製作像」では「顔面」「小顔面」「胸像」「小胸像」「馬上像」「立像」「小立像」「椅子ニ掛ケタル」「腰ヲ掛ケタル像」の9つに分類する。しかし、大きさを捨象して分類すれば、立像、騎馬像、肖像浮彫、座る像の4つのカテゴリーに整理できるであろう。

ここで問題としたいは、共に座る像と考えられる「座像」と「腰掛像」をどのように使い分けるかである。両者の違いを長沼自身は明確に言葉にしてはいない。《長谷川謹介像》については制作当時の写真も残り、また今回石膏原型が発見されたので像容は明らかであるものの、もう一つの「腰ヲ掛ケタル像」である《竹内祐蔵像》が発見できず、像容を伝える写真も残されていない。また「履歴書」で「腰掛像」でなく「座像」に分類されている《原義成像》《金子与四郎像》の作品自体も像容も我々に伝わらない。

しかし、「腰掛像」と長沼が区別して使ったことにはそれなりの意味があると考えなければなるまい。それは「腰掛ける」という語感に第一に求められるであろう。台湾縦貫鉄道を完成し、帰国した長谷川本人をおそらく東京の事務所に訪ねて作られた寿像である本像は、仕事場にいながらリラックスした長谷川の様子を見事に描写している。



▲「楊肇嘉先生像」陳夏雨作 雕塑 1940年
(図15)《楊肇嘉先生像》



(図14)《濱尾新像》

それは、単に椅子に

座って執務する姿を表した像とは異なるように私には思われる。加えて、リラックスしたこの雰囲気は、1932年に堀進二が東京大学構内に制作した《濱尾新像》(図14)や、1940年に台湾出身の陳夏雨が制作した《楊肇嘉先生像》(図15)に受け継がれている。特に後者は、台北駅前に設置された長沼の作品を目にしつつ制作されたことが確実であり、座るモデルの手足やポーズまで長沼の《長谷川謹介像》と瓜二つである。堀も陳も、執務中にモデルが息をつく一瞬を活写する様を長沼作品から学んでいるといえよう。どちらにしても、「立像」でない座るタイプの

像を日本で初めて制作したのが長沼であることは間違いない。

さて、この《長谷川謹介腰掛像》について、制作後106年を経て今回石膏原型が発見された。これは、近代美術史においても非常に珍しいことと言わねばなるまい。ことの起こりは、2016



(図16)「長谷川謹介像制作中のアトリエ」

年5月22日付の書簡が長沼の弟子和田嘉平治の子孫のひとりから本研究チームの共同研究者平澤宛に送付されたことにある。それに答えて写真等を送った平澤に、同年6月10日子孫の方が書簡で「三枚の写真中に和田嘉平治の存在を確認した」という。「長谷川謹介像制作中のアトリエ」(1910年3月、図16)の像の横に立つ人物が和田嘉平治らしい。

このことを前提に、2017年夏に京都在住の子孫と足利市粟谷の本家を継ぐ方に電話で連絡を取る。9月18日、京都の子孫に話を伺いに行く。その際に、亡姉からの伝聞としてその方より伺ったのが次の話である。「戦火の激しくなる中、足利粟谷から人々を呼んで父〔嘉平治〕とふたりで石膏像一体を荷車に乗せ、東京から粟谷の生家まで運んだ。その石膏像が粟谷の倉の二階に保管されている(トラックで荷送して壊れてはならない大事な作品だったようだ)。昭和53年に次兄の納骨の為、粟谷に行った時のことで、姉がこれは長谷川提督だと教えてくれた」という。

本家の子孫とも再度連絡を取り、10月24日に調査に伺うことを決定する。当日は共同研究者平澤と待ち合わせ、本家を訪れた。蔵の二階に《長谷川謹介腰掛像》の石膏原型(図17)を発見し、撮影・計測を行う。

その後、和田家の墓地を訪れ、長沼の弟子がフィレンツェ美術学校で学び、彫刻の王道を日本に伝えたとの自負を書き綴った《芸術碑》(図18)なるものを実見した。



(図17)《長谷川謹介腰掛像》石膏原型



(図18)《芸術碑》

本石膏原型の保存は、まさに和田嘉平治の功績である。和田が本像の日本近代彫刻史上の価値を十分認識していたからこそ、爆撃の激しくなる中、自分の作品ではなく、恩師の石膏原型のみを大八車に載せ、120キロメートルに及ぶ道のり、しかも悪路を数日掛けて実家まで運んだのであろう。この英断がなければ、当該石膏原型は我々に伝わってはいない。本家の現当主は像の由来をご存知なかった。四つあった蔵は一つに整理され、最後のものに本石膏原型が残されていたのは、幸運であった。

七 《久良知寅次郎立像》顔面（田川市石炭・歴史博物館、青銅）（石井）

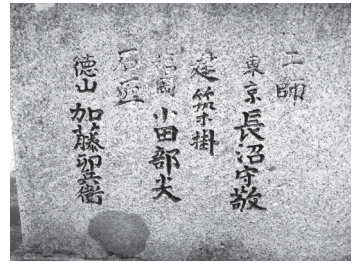
「揺籃時代」は「九州には、倉地某といふ炭鉱王のもの。倉地は若い時道楽して船頭に迄零落し、後幸運にも炭脈を発見した男であつた」(p.150)と述べる。「履歴書」は「故倉地寅次郎氏 立像 鑄銅 豊前国弓削田村」と伝えるが、「訪問記」と「製作像」には記述がない。他方、1928年刊の『偉人の佛』は、長沼作品の写真を掲載しながら、像の作者を朝蔭其明とし、すでに情報に混乱が見られる。

その後、第二次大戦中の金属類回収令により《久良知寅次郎立像》は供出され、大砲や軍艦に鑄直されたと考えられていた。ある日、田川市石炭・歴史博物館の館長であった故安蘇龍生氏より連絡があり、《久良知寅次郎立像》の一部と思われるものが、法光寺の床下から発見された、本像は長沼守敬の作品と考えられるので、鑑定を依頼したいという。そこで、現地を訪れた。

像の建てられた場所は田川市の真言宗大谷派法光寺境内であり、現存する台座には今も「工師 長沼守敬」の名が刻まれた石板(図19)が嵌め込まれている。その台座には新たに《親鸞聖人御像》が載せられ、正面にはそれを示す銘板が嵌められている(図20)。

田川市石炭・歴史博物館にて問題の作品を実見した(図21)。金属供出の際に当時の住職が顔だけ焼き切ったという話が法光寺に伝わっていた。青銅像の顔の部分がこめかみの部分から無残に焼き切られており、かなり乱暴にバーナーを使ったために、頬からこめかみに掛けて内側に曲がり込んでいる。金属供出にあたり、最後の瞬間に思いついて急いで焼き切った様が目に見えようである。確かに顔の作りは歪んでいるが、顔の造形把握や瞳の生き生きとした彫り方に紛れもない長沼の手を見出すことができる。また、同地に残された資料により、制作年がこれまで考えられていた1919年ではなく、1903年であることが明らかとなった。

この調査には蔵地家に連なる自民党国会議員の父娘も加わり、その後、本家の記念碑も見て周った。これと前後して、台湾では日本統治時代に逸名イタリア彫刻家によりつくられた民政長官像(大理石製)の、切り取られた頭部が、やはり領台時代の建物の床下から見つかったが、こうした発見はまさに偶然のなせる技かもしれない。



(図19)「工師 長沼守敬」の名が刻まれた石板



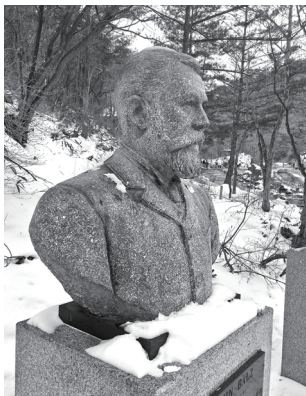
(図20)《親鸞聖人御像》



(図21)

八 《ユリウス・スクリーバ胸像》と《エルウィン・ベルツ胸像》コンクリート像 (石井)

明治の学問黎明期に現東京大学で医学の基礎を教えた2人のドイツ人医師ユリウス・スクリーバとエルウィン・ベルツの胸像は東京大学構内に今も残るが、そのコンクリート像計4体



(図22) 《エルウィン・ベルツ胸像》



(図23) 《ユリウス・スクリーバ胸像》

が草津温泉に存在することが今回わかった。2018年末、研究リーダーは草津温泉で「西の河原公園」に立つ《エルウィン・ベルツ胸像》(図22)と《ユリウス・スクリーバ胸像》(図23)のコンクリート像を偶然発見した。その脇の解説は「東京大学医学部のオリジナル青銅像が供出されたときにつくられたコンクリート製のコピーである

(傍点 報告者)」というが、東京大学のオリジナル像は現存するので、「供出された」とするこの説明は納得できない。そこで、ベルツ記念館で由来を尋ねた。その時落手した沖津弘代良著『ベルツさん』2002, pp.15-16によると

現在、西の河原公園に有ります胸像は、草津町においては二代目に当たります。初代の胸像はベルツ記念館に設置されておりますが、昭和三十二年六月東京大学医学部より贈呈を受けたものです。戦時中、兵器を製造するための金物が供出される不幸な出来事が有りました。東京大学医学部ではもしものことを考え、原形を保存するために同型の像をコンクリートで造りました。幸いに供出にならず、関係の深い草津町に寄贈されたもので、大切に保存をしなければなりません

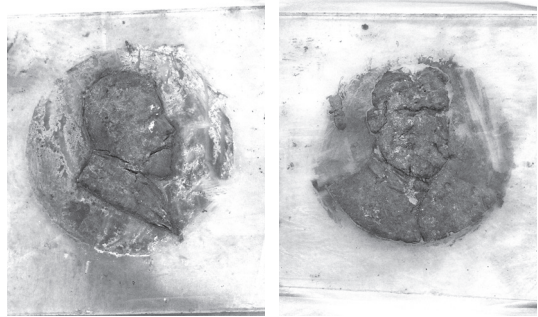
ということである。したがって、ベルツ記念館所蔵の二体が金属類回収令による供出が迫ったときに念のため作られたコンクリート像であり、戦後東京大学より寄贈された初代コンクリート像である。それを基に「西の河原公園」に立つ2体が作られたことになる。東京大学構内には、は金属回収令に基づく供出を免れた銅像が多いが、それも実は風前の灯火であったのだ。

九 《エルウィン・ベルツ金メダル》(習作、または試作) x2 (平澤)

エルウィン・ベルツ (1849-1913) はドイツ、シュトゥットガルト出身の医学者で、明治時代に日本に招かれたお雇い外国人のひとりである。27年にわたって医学を教え、医学界の発展に尽くした。滞日は29年に及んだ。

《ベルツ博士メダル》は、「履歴書」に「ベルツ博士 肖像(メダイル) 金製 同博士家」との記録が残るのみで、現在のところ完成作物は見つかっていない。また、実際のメダルにどのよう

な絵柄が彫られていたかも不明である。その習作もしくは試作品と思われる、硝子板に粘土のようなもので形づくったメダルデザイン・モデルが萬鉄五郎記念美術館に収蔵される。



斜め横からの像と側面からの像の2点試作されたもの(図24, 25)で、どちらが正式に使われたかは不明である。2点共に荒い習

(図24, 25)《ベルツ博士メダル》習作か

作であるにもかかわらず、ベルツ博士の特徴をよく捉えた造形性には脱帽する。メダルという小品においてなお、造形作家としての一面をのぞかせる長沼守敬という彫刻家は、その卓抜した表現能力から、真の意味での日本初の塑像作家といえる気がする。

補遺 《竹内祐蔵腰掛像》に関する調査(石井)

《長谷川謹介腰掛像》の項で触れた《竹内祐蔵腰掛像》については、東京と岐阜での調査によりある程度のこと明らかになったものの、作品を発見するまでは至らなかった。長沼の「履歴書」では《武内祐蔵像》と名字の漢字が異なるが、これは調査によって「竹内」と確認できた。しかし、長沼が書き違えたことにも正当な理由があった。後述する。

2018年1月22日国会図書館議会官庁資料室での調査で、竹内に関する記述を確認できた。服部鐵石編『日露大戦史 岐阜県戦没者芳名録』柴合名会社、茨城1906：復刻版、中川書房、岐阜1982, p.236は「納骨祠(旅) 忠死者霊名(竹内祐蔵) 出身ノ地(西部村) 所属部隊(歩三五) 官等級(中尉) 忠死ノ地(一戸保壘) 忠死ノ時(三七・一〇・三〇)」と述べる。これに対して、檜山幸夫監修『靖国神社忠魂史』第三卷(上)、ゆまに書房、東京2006, p.114では、竹内の官等級は「豫少尉」であるため、戦死によって等級が上げられたと考えられる。

この情報を基に、2018年2月9日岐阜で直接調査を行なった。岐阜大学教育学部で教える友人の協力を得て、当日9時より西部付近で調査を開始した。まず、式内西部神社を訪れたが、神官不在で情報を得ることができなかった。その後、民家、寺を当たり、専慶寺にて現在竹内一族の中心的存在である竹内医院の名を聞く。

当該医院を訪れ、医療法人常務理事と話す。彼女の家は竹内家の分家に当たり、本家の人間が知っているかもしれないと、本家の当主を紹介してくれたが、連絡が途絶えた。名刺を渡し、連絡を待つが、どうも彫刻を捨ててしまったという情報もある。

その後、岐阜市歴史博物館を訪れ、同館学芸員がまとめた『竹内家文書目録』岐阜市歴史博物館編、岐阜1989, pp.28-30の「M. 家 (1) 慶弔」に、「明治38年4月23日 祐蔵葬儀ニ係ル諸書 附入 竹内武一郎」という項目を見つけ、調査した。その際に祐蔵氏の写真も4枚発見できた。しかし、長沼作品に関する資料も竹内家の接点になる人物に連なる情報も見出すことはできなかった。

像主の竹内祐蔵は、日本書紀に登場する武内宿禰の子孫であり、現在の岐阜市の大半の土地を領有していた大地主の子息であるという。訪れた竹内家本家は門構えも素晴らしく、元は蔵を8つも持つ大富豪であったらしい。長沼に「腰掛像」を依頼する経済的な余裕は十分にあると思われる。この武内宿禰のことを聞き及んだのであろう、長沼はそのために祐蔵の名字を「武内」と書いた可能性がある。

まとめ

長沼守敬の作品が「生き残る」かどうかの「運命」の違いは、まず材質によると言える。すなわち、青銅の場合には、金属類回収令による供出が行なわれ、また、像の持つ公的政治的性格によりGHQが破壊するなどのリスクに晒されることが多い。戦時供出に関しては、石膏像はそのリスクを免れている。

次に、機能による違いを考える必要がある。これは最初の「材質」とも密接に関わる問題であるが、公の場に置かれる公的機能を持った像は、当然のことながら長い年月に耐えうるものでなければならず、青銅や石で作られ、人目につくところに置かれる。それゆえに一層、供出や破壊のリスクに晒されることになる。東京大学構内の作品は例外的に供出を免れたように見えるが、草津温泉に残ったコンクリート製の4像は、最高学府に関わる像も供出のリスクに晒されていたことを如実に物語っている。一方、私的機能を持つ作品、すなわち個人的な顕彰のために作られ、それゆえに家や蔵に収蔵された作品は、公的作品に比べて「生き残る」可能性が高いかもしれない。しかし、これも子孫の方のものの考え方に大きく左右されるのは、《竹内祐蔵腰掛像》の例が伝える通りである。

以上のことから、今後逸失作品の調査を行う場合には、長沼が「同家」などと記している個人の邸宅に収められていた作品に焦点を当て、子孫に連絡を取って発掘することが第一の方法として考えられると思われる。この報告が、埋もれた近代彫刻作品発見の今後の一助となることを祈る。

長沼守敬の現存作品に関する3D計測について

大阪芸術大学アート・サイエンス学科客員教授
十二紀行

藝術研究所共同研究「長沼守敬に関する包括的研究」では、第3の柱として「現存作品の3D計測」を掲げた。これに加えて、展覧会での展示や授業の資料として、フォトグラメトリと呼ばれる写真撮影に基づく3Dモデルの構築も目指した。

3Dモデルでの保存は、資料の劣化や破損防止だけでなく、3Dプリンタでの造形や様々な情報を加えて映像化することで展覧会などでの利用が可能になる。また、VR(仮想現実)や空中

映像などの新しい表現での展示も可能になり、多くの来場者に興味を持ってもらえるコンテンツとして活用できる。今回は、3Dモデル構築のために Agisoft photoscan と呼ばれるソフトウェアを導入した。

研究計画立案時における状況が著しく変化したために、種々の問題が惹起され、計画変更を余儀なくされた。急遽東京藝術大学美術学部彫刻科北郷悟教授とその助手井田大介氏の協力を仰いで、3D計測を行なった。計測対象の作品は、移動可能であることが条件であったこと、及び計画変更に伴う予算の再編成の問題から、東京藝術大学美術館に収蔵される《老夫》《長谷川謹介腰掛像 頭部》(図26)と、清周寮収蔵の《岩下清周胸像》(図27)、及び近年発見された《久良知寅次郎立像 顔面》(図28)の四点に限り、2017年8月から12月にかけて順次計測を行なった。所蔵者との契約は研究リーダーが行ない、井田氏の計測・処理したデータを執筆者が3D画像に仕上げた。データはかなり重いが、将来のために役立つことは間違いない。



(図26)《老夫》《長谷川謹介腰掛像 頭部》

(図27)《岩下清周胸像》

(図28)《久良知寅次郎立像 顔面》

一方、公の場に設置され、移動が不可能な作品については別の方法で3D化せざるを得ず、そのために Agisoft photoscan と呼ばれるソフトウェアを購入した。2018年1月28日に、研究リーダー石井と共同研究者平澤、及び執筆者が上京して東京大学に集まり、予め研究リーダーが撮影許可を取っておいた、医学部と理学部の所有になる《エルウィン・ベルツ胸像》(図29)《ユリウス・スクリーバ胸像》

(図30)と《エドワード・ダイヴァース胸像》(図31)の撮影を行った。図32は前二者の背景に嵌め込まれた医学の祖《アスクレピオスの蛇》である。東京大学総合研究博物館から十段の脚立を借り、平澤がカメラを持って撮影を行った。本手法において高精度な3Dデータを取得するには、被写体を出来るだけ多くの方向から



(図29)《エルウィン・ベルツ胸像》

(図30)《ユリウス・スクリーバ胸像》



(図31)《エドワード・ダイヴァース胸像》

(図32) 医学の祖《アスクレピオスの蛇》

撮影することが重要である。その後、ソフトウェア上で処理を行い3Dモデルの構築を行った。図に示すように、本手法ではテクスチャ付き3Dモデル構築が可能であり非常に有効な手法であると言える。

立体の芸術作品については、様々な理由から今後この3Dデータの採取と活用が期待される場所である。アート・サイエンス学科においても、商業的な側面のみならず、アカデミックな分野での3D活用に目を向けていきたい。

長沼守敬と内藤耻叟

五十嵐公一

はじめに

明治三十六年(1903)四月発行の『第五回内国勸業博覧会審査官列伝・前編』(金港堂編)に長沼守敬(1857-1942)に関する二頁の記録がある。これは第五回内国勸業博覧会で審査官を務めた長沼を写真と履歴で紹介したものである。その冒頭部分にこんな記述がある。

君は安政四年九月陸中国西磐井郡一の関に生る、維新の当時水戸の士高橋善吉(号美勝)内藤耻叟氏等難を避けて一の関に潜む、二氏彫金(所謂水戸彫)に巧みなり、君学業の余暇、朝夕二氏の寓に至りて彫金を傍観して飽くことなし、二氏其の熱心を見て屢々彫金術を学ばんことを勧む、幾もなく二氏捕はれて水戸に送らる、君其の具を用ゐ漸く彫金の自習をなせり、(後略)

ここで「維新の当時」のこととして興味深い内容が紹介されている。水戸の士である「高橋善吉」や「内藤耻叟」らが難を避け、長沼のいた一の関に潜んでいた。その高橋と内藤は「彫金(水戸彫)」が巧みであって、長沼少年はその技に魅せられた。学業の余暇に二人のもとに朝夕通い、彫金の技術を飽きずに眺めていた。その熱心な様子を見た二人は、彫金術を学ぶことを長沼少年に勧めた。その後、二人は捕えられて水戸に送られたが、長沼少年は彼らが残っていた道具を用いて彫金の自習をしたというのである。

彫刻家の長沼守敬の出発点が、高橋善吉と内藤耻叟と出会いにあったことを示唆したエピソードだといえる。ところが、これから具体的に見てゆくと、このエピソードには事実誤認と話を面白くするための潤色がある。では、何故それが『第五回内国勸業博覧会審査官列伝・前編』で行われたのだろうか。その背景と事情を、ここに出てくる内藤耻叟(1827-1903)に注目しながら考えてゆきたい。

耻叟と一関

内藤耻叟は、明治前期に活躍した史学者である。『徳川実紀』を校訂出版し、『徳川十五代史』

を著した。これが江戸時代の研究において重要な著作であることを疑う者はいない。

その内藤耻叟は文政十年(1827)十一月、水戸で美濃部又三郎の次男として生まれた。実名は正直、呼名は弥三郎、弥大夫。後に内藤家の養子となり、二十歳だった弘化三年(1846)には家禄百五十石取りとなっている。

よく知られるように、幕末の水戸藩には複雑で激しい内部抗争があった。耻叟は内藤家の立場を踏まえ、門閥保守派と合従連衡した鎮派の一人として行動し、その結果として激しい浮き沈みを経験した。安政三年(1856)に蟄居、安政六年には家禄が削られて長い謹慎を命じられている。しかし元治元年(1864)、耻叟は筑波山で挙兵した尊王攘夷派の天狗党の武力蜂起を鎮圧する側につき復活を果たす。ただ、天狗党を鎮圧した門閥保守派は一枚岩ではなく、それぞれ立場の違いがあった。そこで慶応二年(1866)、耻叟は政治改革の意見書を藩主徳川慶篤に提出。そして、これが原因となり捕縛され、水戸で投獄された。慶応四年三月には出獄が許され蟄居となる。しかし五月、耻叟は身の危険を感じて脱藩し、水戸から東北地方に向かった。幕府の大政奉還後、各地に逃れていた水戸藩の過激派による報復が始まっていた。耻叟はそれから逃れたわけである。東北地方に向かった耻叟は会津城の戦いに参加し、会津城落城前には米沢、その後に仙台、そして一関へと逃れた。

耻叟は一関に逃れていた頃の事情を明治二十四年(1891)の「懺悔物語(下)」(『日本之少年』3-24, 1891年)で回顧している。その中に「一関の君侯も同しく江戸に出立つとの事なれば余は謝去らんとせしが此藩の人々は皆義侠ともいふへき人々なれば余を留むると切にして学校に入り其学校の生徒に講授などして其年もくれぬ(後略)」とある。ここにある「其年」というのは明治元年(1868)のことである。つまり明治元年の暮、耻叟は確かに一関に潜伏していたのである。耻叟は一関の学校に入り、生徒に講授などをしていたという。この明治元年、耻叟は四十二歳である。

そして、この時に耻叟と長沼は出会った。そのことを昭和十一年(1936)に長沼が回想している。長沼の聞き書きを高村光太郎がまとめた『現代美術の揺籃時代』(『長沼守敬とその時代展』図録、長沼守敬とその時代展実行委員会、2006年)で次のように記されている。

話は昔に遡るが、郷里にをる時分、水戸藩に御存じの「天狗騒ぎ」が起きて、諸生派の漢学者内藤耻叟といふ者と高橋善吉等が岩手へ逃げ込んで来たのを、田村藩の若い連中が保護してゐた事がある。此の高橋善吉が水戸彫をよくし、近所の長屋で何時もこつこつ色々な物を彫つてゐた。私は近所の事とてよく遊びに行つて熱心に見てみると、高橋は、武さん(私の幼名)は好きさうだから教えてあげよう、と云つて呉れたが、藩校に通つてゐた事とて教えて貰ふ事が出来なかつた

耻叟は田村藩つまり一関に逃げ込んでいて、そこで長沼と出会ったというのである。この明治元年、長沼は十二歳。そして、耻叟と同じく一関に逃げ込んでいた水戸藩士に高橋善吉がい

た。この高橋が水戸彫をよくし、長沼はこれに興味を示した。水戸彫を教えてやろうと長沼に言ったのも、この高橋だったというのである。

このことを踏まえた時、想起したいのが冒頭で見た『第五回内国勸業博覧会審査官列伝・前編』である。そこには高橋善吉と内藤耻叟の二人が水戸彫に巧みであり、彼らから彫金術を学ぶことを勧められたと記されていた。しかし、この『現代美術の揺籃時代』によるなら、彫金が巧みだったのは高橋だけである。耻叟だとは記されていない。また、耻叟の諸史料をあたっても、耻叟が彫金に巧みだったとする記録が全く見つからない。つまり、『第五回内国勸業博覧会審査官列伝・前編』は長沼と耻叟の出会いを、彫金に巧みであった高橋善吉という人物を登場させることにより潤色しているわけである。

では、その高橋はどうなったのだろうか。このことについては先の『現代美術の揺籃時代』に記録があり、多少のことが分かる。水沢の県庁から手が廻り、高橋は捕縛されたのである。長沼はその場面を見たともいう。そして高橋は水戸に送られ、獄死したという。長沼が高橋に最後に会ったのは、捕縛の時だったわけである。ただ、その捕縛前、高橋は家賃の代わりとして彫金のための道具を置いていったようだ。その道具を借り、長沼は高橋の仕事を真似て金物などを彫ったと証言している。これは冒頭の『第五回内国勸業博覧会審査官列伝・前編』にも記されていることでもある。

以上のことから明らかなように、長沼と水戸彫との接点にいたのは高橋善吉であり、内藤耻叟ではなかったのである。

耻叟と長沼の再会

一関で高橋善吉は捕らえられた。「懺悔物語」には、耻叟らと同じく東北地方に逃れた同志のうち、仙台城下に潜んでいた者たちは悉く捕らえられ、水戸に送られ死刑となったと記されている。耻叟も安全ではなかったのである。

そこで耻叟は一関を去って逃亡した。そして奥羽を彷徨した後の明治三年(1870)十二月、耻叟は山形県史生となった。慶応二年六月に版籍奉還がなされたことにより、状況が変わったのである。

そこで耻叟は湯沢三四郎正直と名を変え、山形県史生として明治六年八月まで勤める。まだ本名を名乗れる状況ではなかったからである。しかし、その後に素性が知られる。そして司法省から上京を命じられ、前歴調査がなされて明治七年一月から耻叟は大蔵省統計寮十二等として出仕した。明治十年には東京府に転じ、明治十一年に小石川区長、明治十四年には群馬県中学校長を務める。その後、東京に戻った。

以上が一関を去った後の耻叟の動向だが、一関で高橋善吉の捕縛を目撃した後の長沼はどうなったのだろうか。明治六年(1873)、長沼は次兄を頼って札幌に赴き、漢籍を学んで身を立てようとしている。明治七年には上京し、小石川の中村敬宇の同人舎で英語を学んだ。しかし、学資が続かずに退学。明治九年に通弁見習として在東京イタリア公使館に雇われた。公使のア

レッサンドロ・フェ・ドスティアーニ伯爵が長沼を見込み、イタリア語習得のための便宜を図ってくれたのである。この時、長沼は二十歳。興味深いことに、ここまでの長沼の行動の裏には常に語学が関わっているのだが、ここで長沼はイタリア語と出会っている。ただ、この時点で長沼はまだ彫刻とは出会っていない。彫刻よりイタリア語との出会いが先だったのである。その後の明治十四年(1881)、フェ・ドスティアーニ伯爵を継いで在東京イタリア公使となったラッファエッロ・ウリッセ・バルボラーニ公爵に従い、長沼はイタリアに渡った。

その長沼が在東京イタリア公使館に勤めていた明治十一年頃、長沼は耻叟と再会したようだ。そのことは『現代美術の揺籃時代』に「漢学者の内藤は命を全うする事が出来、後小石川の区長などになつてゐて再会した」とあることから分かる。耻叟が小石川区長となっていたのは明治十一年頃である。その頃に再会したわけである。明治十一年に長沼は二十二歳、耻叟は五十二歳。約十年ぶりの再会ということになる。生き延びて小石川区長になっていた耻叟と、イタリア語を学び始めた長沼が何を語ったのかは分からない。しかし、ここで注目したいのは二人が重要な仕事をしてゆくのは、実はこれ以降だという点である。この時点ではその萌芽が見られるだけである。その後の二人の動向を追ってゆきたい。

二人のその後

内藤耻叟は明治十四年(1881)以降、東京で活発な活動を行うようになる。この頃から『徳川実紀』の校訂出版を行い、大学で教鞭をとるようにもなった。明治十七年には東京大学文学部の講師。明治十九年(1886)には帝国大学令により東京大学が帝国大学と改組され、帝国大学文化大学の教授となり明治二十四年三月までこれを務めた。この間、『安政紀事』(明治二十一年刊)など江戸時代に関する著作を次々と発表している。そして、明治二十六年から『徳川十五代史』十二冊を刊行した。その例言に「余カ徳川氏ノ史ヲ修メント志シハ、既ニ三十年前ニ在リ」とあるように、これは耻叟のライフワークのような仕事だった。それがやっと完成したことになる。このように見てゆくと、耻叟の仕事が大成し、その名声が上がったのは五十五歳となった明治十四年以降だといってよさそうだ。

では、長沼はどうだろうか。明治十四年(1881)三月、長沼はラッファエッロ・ウリッセ・バルボラーニ公爵に従ってイタリアに渡る。ヴェネツィア商業高等学校日本語講座の教師となるためだった。この職には同年十一月から就いた。担当する授業は夜学の週三度。そのため昼間は仕事がない。しかし、遊んでいてはもったいない。そこで何か研究しようと考えた長沼は、ヴェネツィア美術研究所に在籍し彫刻を学びはじめる。これが長沼と彫刻との出会いだった。

ヴェネツィア美術研究所に入った長沼は、ルイジ・フェルラーリとアントニオ・ダル・ツォットの指導を受ける。勤勉で才能もあった長沼は教師たちから高い評価を得てゆく。そして留学の総決算として「リド島にて」を制作し、1887年にヴェネツィアで開催された内国美術博覧会に出品した。この作品は現存しないが、まずまずの評価を得たようだ。

明治二十年(1887)八月、イタリアで彫刻を学んだ長沼は六年ぶりに帰国した。この明治二十

年には東京美術学校も設立されており、明治二十一年四月に長沼は東京美術学校設立事務所に隔日で勤めることにもなる。同年八月には農商務省管轄下の博物館で鑑別の仕事をするようになり、十一月には第三回内国勸業博覧会の事務を委嘱されるなど農商務省系の美術行政に関わるようになっていった。この内国勸業博覧会と長沼の関係は続き、明治二十八年(1895)には第四回内国勸業博覧会、そして明治三十六年(1903)の第五回内国看病博覧会の鑑査員に任命される。冒頭の『第五回内国勸業博覧会審査官列伝・前編』は、その関連史料なのである。

先に見たように、内藤耻叟が知名度を上げてゆくのは明治十四年(1881)以降だった。そして、長沼がイタリアに渡ったのは明治十四年から明治二十年である。ということは、長沼がイタリアから六年ぶりに帰国すると、十二歳の時に一関で出会った耻叟の名声が上がっていた。明治二十年には耻叟は帝国大学文化大学の教授となっていて、複数の著作を発表していた。このことに長沼は驚いたのではないだろうか。

そこで帰国後、彫刻家として活躍するようになった長沼は、少年時代に一関で耻叟に会っていることを周囲に話した。高村光太郎がまとめた『現代美術の揺籃時代』にもそれが掲載された。耻叟が一関に逃れてきた状況、耻叟と長沼との出会い、そしてその後の二人の活躍を考える時、その話は極めて面白い。そこで、それに潤色が加わった。耻叟とともに一関にいた高橋善吉の水戸彫の技に長沼が魅せられたという史実が、「高橋善吉の」ではなく「高橋善吉と内藤耻叟の」になってしまったのもそこに原因があったと考えられるのである。